

自らの体験や感じたことから
 県福祉作文コンクール表彰式開催

去る1月19日に、第36回神奈川県福祉作文コンクール（共催：県共同募金会、後援：県・市町村教育委員会、NHK横浜放送局、神奈川新聞社、テレビ神奈川、日揮社会福祉財団）の表彰式を県社会福祉会館で開催しました。

審査、県最終審査会で選考され、優秀賞16編、準優秀賞20編、佳作20編、合計56作品が表彰されました。長倉勉審査委員長（神奈川新聞社）からは「すべての応募作品が日常生活から福祉の原点や家族・友人との絆、生きることの素晴らしさを読む側に伝えるものが多かった。この思いを忘れずに勉強・スポーツに励み、21世紀の日本を支える大人に成長していけることを願っています」と講評をいただきました。

本紙では全応募作品を代表して、本会会長賞（小学生の部）を受賞した、松田町立松田小学校6年・本多花乃音さんの作文を紹介します。

（地域福祉推進担当）



上：本会会長賞の本多さん
 下：本会会長賞（中学生の部）清水菜々子さん
 （葉山町立葉山中学校3年）

右：県知事賞「僕とみんな」を手話で朗読する星野秀太さん（県立平塚ろう学校中学部）。小学生の部は、金井駿介さん（横須賀市立望洋小学校4年）が受賞し朗読



優秀賞 神奈川県社会福祉協議会会長賞

おじいちゃんの笑顔

松田町立松田小学校 6年 本多 花乃音

福祉について考えた時、最初に頭にうかんだのは「障害者」という言葉でした。私は、障害者のことについて考えていると、母が「あなたのおじいちゃんも障害者なのよ。」と言いました。私は、おじいちゃんが障害者だったことを知っていたはずなのに、気が付きませんでした。「なぜだろう。」そう思いながら、おじいちゃんのことについて考えてみました。

私のおじいちゃんは、ほとんど耳が聞こえません。補聴器を付けていますが、それでも聞こえにくいようです。昔、鍛造の仕事をしていたため、大きい音をいつも聞いていたら、聞こえにくくなってしまったそうです。だから、おじいちゃんの家のテレビの音はいつも大きく、会話する時はゆっくり大きな声で話さなければなりません。でも、おじいちゃんは私と同じくらいいつも元気で、私がおじいちゃんの家に行くと、とても喜んでくれます。また、人が大好きなので、人と会話する時はいつも笑顔です。そんなおじいちゃんは、私の自慢でもあります。

また、おじいちゃんの右手の中指は第二関節から先がありません。仕事の機械に指をはさんで、指が取れてしまったそうです。けがをして、最初はペンを持つこともできませんでした。そこで、書く練習を何度もしたそうです。今ではきれいな字が書けるようになっています。

町などで障害者を見かけた時、いつも私は「大変そうだな。」と黙っていましたが、でもそう思うのは、不自由な部分しか見えなかったからで、おじいちゃんのように毎日楽しく暮らしている人も多いはずです。

そのことに気が付き私は、障害というのは一つの個性なんじゃないかなと思えました。不自由なことはあるけれど、おじいちゃんはずっと笑顔で、私達に元気をくれます。だからおじいちゃんが障害者だったことに気が付かなかったのでしょうか。私も苦手なことはあるけれど、得意なこともあります。そういう一つ一つが、その人の個性なんだと思えてきました。

福祉の意味は「人々が満足するような生活上の環境」だそうです。その環境を作るのは私達一人ひとりだと思います。みんなができることを考えて、実行していくことが「福祉」だと思います。今、私にできることは、おじいちゃんのようにいつも笑顔でいることです。